黙想:死者の日(11 月2日)

黙想のテーマ:「イエス、天の住まいを約束される」「煉獄の霊魂と彼らのための祈り」「煉獄の霊魂との助け合い」

イエス、天の住まいを約束される

煉獄の霊魂と彼らのための祈り

煉獄の霊魂との助け合い

イエスは、今日、私たちに仰せにな ります。「心を騒がせるな。神を信 じなさい。わたしをも信じなさい。 わたしの父の家には住む所がたくさ んある」(ヨハネ14・1-2)。全ての 死者を記念することは、永遠の命と いう現実を考え直し、永遠に続く真 の愛との決定的な出会いへの希望 に、心を向けるのに良い機会です。 私たちは誰も死を経験したことはな いので、その時がどのようなもので あるかを知りません。神は御子に、 私たちの住まいが準備されているこ とを知らせるよう、お望みになりま した。

「昨日と今日、多くの人が墓地を訪れました。ラテン語系の墓地ということばには、最後の目覚めを待ちながらの『眠る場所』という意味もあります。イエスご自身がわたしますを起こしてくださるとは、何とでは、行とでしょう。肉体の死は、イエスが目覚めさせてくださるまで

の眠りであることを、イエスご自身が明らかになさいました。このことを信じつつ、わたしたちは愛してくれた人、お世話になった人の墓を訪れ、また訪れずともられています。ですからも記憶されています」で思い起こすよう招かれています」
TII。

「行ってあなたがたのために場所を 用意したら、戻って来て、あなたが たをわたしのもとに迎える。こうし て、私のいる所に、あなたがたもい ることになる」(ヨハネ14・3)。

「人間は永遠のいのちを必要としています。永遠の命への希望以外の希望はすべて、人間にとって、あまりにも短く、限定されたものでしかありません。空間と時間さえも超える全体性のうちに、死も含めたあらゆる孤独を乗り越えさせる、愛である方が存在するとき、初めて人間とは

何かを説明することが可能です」 ^[2]。

「主よ、彼らに永遠の安息を与え、 永遠の光を彼らの上に輝かせてくだ さい一ा。まだ天国に行きついてい ない信者の霊魂には、苦しみと同時 に喜びもあります。煉獄では、痛み と喜びが神秘的に絡み合っていま す。喜びのわけは、神にまみえるこ とが確実だからです。地上において も天においても幸福になろうと決心 して、戦いに勝ちました。栄光の一 歩手前にいるのです。ですから、キ リスト教では、伝統的に彼らを「祝 福された煉獄の霊魂」と呼んでいま す。

そこでは、苦痛さえも喜びの泉です。なぜなら、苦しみを受け入れるのは、神のみ旨に全てを委ねており、未だ不完全であっても、生き生

きとした愛で、神の聖性の神秘をあがめているからです。煉獄についての幻視を見た人として知られているジェノバの聖カタリナは、煉獄を

「地上の事柄と同じようなものとして紹介しているのではありません。 火と言っても外的なものではなく内的なものなのです。内的な火、これが煉獄なのです。聖女は、神の無限の愛に対して犯した、罪による深い痛悔から出発する、神との完全な交流に向かう人の浄化の道について話しているのです」[4]。

司祭は、第二奉献文で皆を代表して神に願います。「復活の希望をもの兄についたわたしたちの兄もの兄ものいつくしみのうちにと、あなたのいつ人を心に受け入れてくなったすべての人を心に受け入れてくなったの中に受け入れてくない」「51。私たちが捧げる煉獄の忠さ、まりをがです。ミサ聖祭です。まりをは死者のための祈りの内で、最も尊いのための祈りの内で、最も尊いのための祈りの内で、最も尊いのための祈りの内で、最も尊いるとができます。教会は、

彼らができるだけ早く天国に行くよう望んでいるので、今日、全司祭い 3回のミサを捧げることを許してい ます。私たちもまた、平和を望んがいる兄弟たちのために、熱になる兄弟たちのために、熱にながりを捧げます。感謝の祭儀にかるです。ですりながり、で者の行為という、はいの行為というに執り、で者の信心は、死者のために執りしを願う祈りの真の手段です。

「死者のためのわたしたちの祈りは、死者を助けるだけでなく、死者がわたしたちのために執り成すの有効にすることができるのです」。聖人たちは、この相互援助の熱愛者たちでした。聖アルフォンソ(煉オン・デ・リゴリは、「主がいの霊魂に)私たちの祈りを知ららいると、愛徳に満ち溢れている彼らのことだから、確かに私たちのために

執り成してくれる | m と信じること ができると強調しています。幼きイ エスの聖テレサは、度々彼らの助け を頼み、その助けを受けた後は、彼 らに借りがあると感じていました。 「私の神よ、御身が、煉獄の霊魂へ の私の借りを返してくださるようお 願いいたします」図。聖ホセマリア も彼らと〈共謀〉したことを告白し ています。「最初、煉獄の霊魂が同 伴していることを強く感じました。 彼らのために祈り、その執り成しに 頼るようにと、スータンを引っ張っ ているように感じたのです。それ以 来、すばらしい助けが続きました。 そして、この現実を人々に話し、心 に留めることを願いました。煉獄の 霊魂は私のよき友です!嗄。

聖人たちのこの経験は、愛する人たちへの愛が、死を越えて行くことを示しています。「人は誰も独りで存在することはできないということです。わたしたちの存在は互いに深く

交わり合っています。数えきれない 関係によってつなぎ合わされていま す。だれも独りで生きることはあり ません。だれも独りで罪を犯すので はありません。だれも独りで救われ るのではありません。他の人の人生 は、わたしの人生の中に入り込み続 けます。わたしの思い、行ない、な しとげることの中に入り込み続けま す。 (…) キリスト信者であるわた したちは『わたしはどうすれば救わ れるだろうか』と問うだけではいけ ません。わたしたちはこうも問わな ければなりません。『他の人が救わ れるために、他の人にも希望の星が 上るために、わたしはどうすれば良 いでしょうか』。そうすれば、わた しは個人としての救いのためにもで きるだけのことをすることになるの ですしい

「十字架のもとでキリストの死を悲しみ、キリストの復活にあずかったマリアに心を向けます。死者のため

[1] フランシスコ、「お告げの祈り」でのことば、2014年11月2日。

[2] ベネディクト十六世、謁見、 2011年1月2日。

[3] ローマミサ典書、死者の日のミサ、入祭唱2。

[4] ベネディクト十六世、謁見、 2011年1月12日。

- [5] ローマミサ典書、第二奉献文。
- [6] カトリック教会のカテキズム、 958番。
- [7] 聖アルフォンソ・マリア・デ・リゴリ『偉大な祈りの手段』I,III.
- [8] 幼きイエスの聖テレサ、1897年8 月6日「最後の対話」。
- [9] 聖ホセマリア、1967年の言葉。 ハビエル・エチェバリア『福者ホセマリア・エスクリバーの思い出』より。
- [10] ベネディクト十六世『希望による救い』48番。
- [11] フランシスコ、「お告げの祈り」でのことば、2014年11月2日。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-shisha-no-hi/(2025/12/17)